

International Culture Appreciation & Interchange Society, Inc.



一般社団法人

海外と文化を交流する会

(一社) 海外と文化を交流する会会報

2016年12月発行 第61号



当会創立者「松岡 朝」写真（1932年 コロンビア大学より法学博士号取得）

- 目次 ★「つどい」のお知らせ
★「松岡 朝 物語」（仮称）第4回（P4）・第5回（P10）

「つどい」のお知らせ

～多文化社会オーストラリア～ 民族、歴史、将来への歩み
講師：青山学院大学 総合文化政策学部 飯笹 佐代子 教授

参加費 無料

日時：2017年1月21日（土） 開演13時30分より15時（開場：13時15分）

場所：銀座教会地下集会室 東京都中央区銀座4丁目2-1 電話：03-3561-2910

テーマ：～多文化社会オーストラリア～ 民族、歴史、将来への歩み

内容：日本にとって、アメリカに次ぐ重要な国であるオーストラリアです。そのオーストラリアの国、社会についての概要や魅力を紹介しながら、その中でアボリジニ絵画も含めた美術についてもお話しさせていただきます。

講師プロフィール：

青山学院大学 総合文化政策学部 教授。福岡県生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了、博士（社会学）。ケベック州政府文化間関係協議会（在モントリオール）、ニュー・サウス・ウェールズ大学アジア・オーストラリア研究所（在シドニー）等にて客員フェローなどを経て現職。専攻：多文化・多民族共生論、シティズンシップ政策論、オーストラリア政治社会等。著書「シティズンシップと多文化国家 オーストラリアから読み解く」など多数。



佐々木典子&大澤一彰デュオリサイタルのお知らせ（後援）

本年度も当会のチャリティーコンサートでお世話になったテノール・大澤一彰氏と、ソプラノ佐々木典子氏によるデュオリサイタルが2017年1月に東京にて開催されます。

2017年1月9日（月・祝）14：00 開演 東京文化会館小ホール ¥5,000（全席自由）
チケット購入先は 当会事務局 03-3370-3973 松岡までお問合せください

2016年チャリティーコンサート終了のご報告

2016年10月28日に霊南坂教会にて第4回大澤一彰氏によるチャリティーコンサートを7名という豪華メンバー出演により開催致しました。生憎の雨にも関わらず、オーストラリア大使館及び日本への留学生たちを含めて280名近い方々にご来場いただき、盛会裏に終了しました。協賛の東洋英和・福島の子ども支援プロジェクトにも皆様のご協力のお陰で、本年度も寄付することが出来ました。

東伏見宮妃殿下へ 松岡女史御進講

「会社と立法関係の保に就て」

東伏見宮妃殿下には米國
コロムビア大學で法學博士の
學位を受け、現在英國スプリ
ングフィールド大學で日本美
術史を講義する松岡朝子
女史(ハルコ)を十
月九日(日)朝、現在在英國ホ
ナルに滞在、各地方館の社理事
務を兼務に視察してゐるが、
去る五日(日)朝の高
橋事務官を連
れて朝子の
光榮を受



日午後一時半よ
り讀谷常智の御
殿に召され同女史より「社
會と立法との關係」に
ついて約二時間にわたる講義
を御聴取された、女史は

け、感
謝して十
日コロムビ
ア大學法學のガ
ウンを御用して宮家に同慶、
妃殿下を偲め高貴の御方の御

前で御親を御法その御願
について御進講したが、妃
殿下には御進講熱心に御願取
に相成り、時々御質問あらせ
られ女史は恐縮して同四時御
殿を辭した

松岡女史は大正十年佛英和
女學校卒業後漢米勉強の上
渡歐各國社實事業見學の後
コロムビア大學で同記學位
を受け日本女性として大い
に氣をはいた社實立法の一
學徒である

御進講後女史は難る
短い時間に全般にわたつて
御話を申上げましたが、
殿下にはこの方面にも廣
い御知識を持たれ御質問は
もちろんノートにも取ら
れ唯々感激の外は御進講
ませんでした【朝子は松岡
女史】

昭和7年(1932年)10月10日 朝日新聞に掲載された記事

1928年（昭和3）の夏、朝は横浜の港に降り立った。6年ぶりの日本だ。

波止場には大勢の出迎えの人たちが集まっていたが、その中には、父・健一や母・幸などの姿があった。その中のひとり——茶色のコートを着て髪を三つ編みにしている美しい少女が、朝に向かって何度もお辞儀をした。

朝はすぐにそれが誰だか気づかなかった。それは、6年前はわずか12歳だった少女、姉の啓子の長女・初江だった。あまりにも大きく成長した姪の姿に、朝は、時の流れを感じずにはいられなかった。

実際、日本は大きく動き出していた。

この年の2月には、第1回普通選挙が行なわれた。しかし時の田中義一内閣は選挙干渉を辞さず、選挙後は、治安維持法により日本共産党を弾圧した（「三・一五事件」）。さらに特別高等警察（特高）を設置し、国民への監視を強めていく。関東軍による「張作霖爆殺事件」（満洲某重大事件）が起きたのもこの年の6月だ。

一方で、街は華やいでいた。ダンスホールは取り締まりを受けるほど繁盛し、女性のスカート丈は膝上まで短くなった。銀座や大阪の道頓堀では、カフェが大流行する。

朝は、帰国に際し、ある「お土産」を用意していた。それは、メトロポリタン美術館の甲冑部から借りてきた記録映画だ。そこには、ヨーロッパの古い甲冑が映し出されていた。

メトロポリタン美術館でお会いした秋山光夫氏を頼って、朝は帝室博物館を訪れた。映画の話をする、皇族の方々も招いて映画会を開催しようということになった。

朝は奇妙な感慨にとらわれた。

アメリカで学んだ日本の女性が、よりによって帝室博物館という場所で、皇族を前に、ヨーロッパの甲冑についての講演を行なうことになろうとは。

1928年8月の講演会で、集まった人々の関心を集めたのは、「鎖帷子(くさりかたびら)」だった。

日本の鎧は、戦の際、命にかかわる部分だけを覆っており、体の露出部分が多い。まるで鳥かごのようだ。そして儀式の際にも鎧が着用される。

一方、ヨーロッパの鎧は実用一辺倒だった。敵の槍や短剣がどこを突いても大丈夫なように隙なくしっかりと作られていた。その象徴が鎖帷子で、かなり鋭い短剣でも突き刺すことはできない。手袋も鎖で編まれており、指は自由に動かすことができた。その手袋は、戦国時代の著名な甲冑師・明珍信家の繊細な仕事を彷彿とさせた。

講演会の参加者の中に、東伏見妃殿下の侍従の方たちがいた。その侍従の推挙があったのか、朝は、東伏見妃殿下からお招きをいただき、その映画を再び宮中でご覧に入れることになった。東伏見妃殿下は、嫁ぐ前の名を岩倉周子と言い、岩倉具視の孫にあたる方だった。戦死者の遺族・傷病兵を救うために結成された「愛国婦人会」の初代会長を務めるなど、社会事業に熱心だったことでも知られている。

朝は、ヨーロッパの文化に対し、日本の文化の中枢にいる皇族が好奇心を抱いてくれていることが感慨深かった。別々の文化の掛け橋を担っている。そのことが嬉しかった。

宮中での講演会のあと、朝は東伏見妃殿下から直接、声をかけられた。

「あなたはこのあと、博士過程の勉強を成就するために、アメリカへ帰らなければならないと聞いています。でも、日本滞在中は、日本文化の最上のもを見て欲しいと思います。そうすればあなたのアメリカの友人たちへ、話題が提供できるでしょう」

東伏見妃殿下は続けた。

「これからの時代、文化交流がもっとも重要だと考えています。互いの文化や美しいものへの尊敬や理解が、友情を育み、そしてそれが、国と国との相互理解への道筋になるのではないでしょうか」

朝は大きく頷いていた。そしてそのあとの東伏見妃殿下からの申し出に、朝は興奮で顔を紅潮させた。東伏見妃殿下は、皇族や高名な研究者など、特別な人間にだけ許可されている東大寺正倉院の「曝(ばく)涼(りょう)」に、朝を招待すると言ってくれたのだ。



15

東大寺の正倉院は、言わずと知れた、奈良・天平時代を代表する建造物だ。高床式校倉(あぜくら)造りと言われる特別な建築方式で、総檜造り。間口約33メートル、奥行約9.4メートル、床下約2.7メートルという巨大な建物で、南北に長く、内部は、北倉、中倉、南倉の3室に仕切られている。

正倉院の宝物は、9000点と言われているが、古文書だけでも780巻以上、ガラス玉類は完全なものだけで約7万個もある。細かく数えれば、何十万点にもなりかねない。湿度の高い日本では、空気の乾燥した時期に、衣類や書物・諸道具などを日にさらして、風を通す——つまり虫干しを行ってきた。これを「曝涼」という。正倉院でも例外ではなく、定期的に曝涼が実施されてきた。曝涼は宝物点検の機会でもあった。この催しに、朝は招待されたのである。

その年の11月——からりとしたさわやかな秋の日に、学者や皇族の方々は奈良へと移って行く。朝は、渡り鳥を連想した。冬鳥は、秋の終わりになると暖かい地を求めて、北の国から日本へと渡ってくる。木枯らしが吹き始めた東京から、秋真っ只中の奈良への移動は、大きな自然の営みと重なって見えた。

朝が始めて目の前にした正倉院の建物は、ことのほか大きかった。3つの建物はひとつ屋根で結ばれていた。建物はそれぞれ、「北倉」、「中倉」、「南倉」といい、3つの建物を1本の幅拾い廊下がぐるりと一周していた。

いちばん大きな特長は、校倉造りといわれる壁の組み上げ方だった。切り口の断面が三角形の木材(校木)を、互い違いに井桁に組んでいる。校木の先端は突き出ている、空に向かって逆三角形

を形作っている。窓はなく、それぞれの倉には扉がひとつずつしかない。もちろん、釘や金属類は一切使われていない。

正倉院が造られたのは、700年代半ば、天平時代のことと言われているが、それからゆうに1000年以上、建物やこの中の貴重な品々は、損なわれることなく今まで生き残ってきたのである。バビロンやエジプト、中国などの四大文明の美術品も数多く残されているが、それは皆、墓や地中から発掘されたものである。こうして、ひとつの宝物庫の中に収められ、継続されてきたということは驚くほかない。

しかもそれは、独創的な方法だった。校倉造りの校木には隙間があり、湿気が多いと木が膨張し、木と木の隙間がなくなり、湿った空気を遮断する。乾季には、逆に校木が乾燥し、隙間が大きくなるので、空気が循環しやすい。高床式になっていることも、湿気から守る工夫だろう。

しかも正倉院は、東大寺の寺域にある。聖武天皇が建立した東大寺は、これまで2度の戦火にあっている。1度目は、平氏による「南都焼討」(1181年)。2度目は戦国時代。松永久秀らによる「東大寺大仏殿の戦い」(1567年)で、どちらの戦いでも、東大寺の大部分は兵火で焼け落ちた。だが正倉院だけは、無傷を保ったのである。

戦火を免れただけではない。国が荒れると跋扈する盗賊からも正倉院は無事だった。強奪や窃盗は、たった1枚の紙によって退けていた。「勅封」という天皇の封印である。正倉院の扉のかんぬきは紐で嚴重に縛られ、その紐の中には、天皇の名を署した封紙が入っている。1000年以上の歴史の中で、この「勅封」が破られたという記録はない。

明治時代になり、正倉院が宮内庁の管轄になると、皇室は毎年秋の虫干しを許可し、特別な人々にだけ宝物殿を訪れてもよいとした。毎年11月、東京と奈良の帝室博物館館長が封印された扉を開き、正式な開場宣言を行なう。そして宝物殿の調度品を調査し、古代の箆笥にしまわれている美術品を検査する。

16

朝は、正倉院の入り口に設けられた、とてつもなく大きな芳名帳に署名した。この瞬間、朝は、自分に与えられた名誉の大きさを知った。朝以外の人間は、肩書きや勲章、宮中の地位を記入していたが、朝に記入できる肩書きはなかった。しかも招待された女性はごくわずかだった。

中に入る。外側から見ると、建物は平屋ようだが、実際は2層になっていて、梯子で行き来する。さらに屋根裏のスペースもあった。内部には巨大な円柱が何本も建ち並び、全体を支えている。

「これは奇跡……」

宝物を目にした朝は、思わず言葉を漏らした。正倉院が静寂のまま、こうして今も輝きを放っていることに対して、朝は深い崇敬の念を呼びさまされた。

近くにいた久保田鼎(かなえ)奈良帝室博物館館長が、朝を、正倉院の中でも最も大切な宝物に注意を向けさせてくれた。

例えば、北倉に収蔵されている、聖武天皇の個人的な持ち物、皇居で使用された種々の楽器、たんすや机のような日常の品々、羽毛や織物生地で覆われた屏風、香、薬、宝物の記録目録……。

中倉には、古代の鎧や武具、見事でかつ完璧なコレクションの薬草、象牙の物差し、水晶の珠、聖典、そして楽器類。

南倉には宗教的なものが多く、仏像、伎楽の面、銅鏡などがあつた。

どの蔵も窓がないため、内部はかなり暗かった。倉に許されていた光は、扉が唯一だった。朝たち一行は、懐中電灯を手に、内部をめぐる。

正倉院の数々の宝物の中でも、最も重要なものは、「東大寺献物帳」だ。これは、東大寺の盧舎那仏に品々を献じた際の献納品の目録で、全部で5巻。各巻冒頭の文言や献納品の名称などにより、それぞれ『国家珍宝帳』『種々薬帳』『屏風花氈等帳』『大小王真蹟帳』『藤原公真蹟屏風帳』と呼んで区別している。

朝は中でも、『国家珍宝帳』に目を奪われた。

〈奉為 太上天皇捨国家珍宝等入東大寺願文 皇太后御製〉

で始まる、楷書体の美しい文書だ。

「亡くなられた（聖武）天皇の思い出を永く留めておくために、私（光明皇后）は国の宝物をすべて東大寺寺院に寄贈しました……」

朝は、光明皇后に思いを馳せた。

文書の最後には、〈天平勝宝八歳六月廿一日〉と日付がしたためられている（天平勝宝7年から9年まで、勅命により「年」が「歳」に改められている）。天平勝宝8年とは、聖武天皇が崩御した年である。聖武天皇が、盧舎那仏（東大寺の大仏）造営を発願してから13年後、東大寺建立（大仏開眼）から4年後のことであった。

聖武天皇と光明皇后はともに、仏教に深く帰依したが、聖武天皇の菩提を弔うため、宝物を寄贈したのが、今日の正倉院のおおもとなのである。そしてその思いを記したのが、『国家珍宝帳』だった。6月21日という日付は、聖武天皇が亡くなってから49日目にあたっていた。

冒頭に願文が記され、次に献納品の目録を記し、日付けの後に、大納言兼紫微令の藤原仲麻呂以下5人の自署があり、楷書体で記された墨書の上から、天皇御璽が全面に三段ずつ押されている。白麻紙と称する上質紙を張りついだ巻物で、長さは15メートル近くあった。またこの紙は、現存する最古の和紙のひとつとされている。

朝にとっても、光明皇后は興味深い人物だった。

光明皇后は、国分寺の建立、東大寺大仏の造営などを積極的に勧めたといわれているが、それだけでなく、薬草の栽培や、薬を蓄えて貧病者に施与するのを主目的とした「施薬院」や、身寄りのない貧窮の病人や孤老を收容する「悲田院」など、福祉施設を積極的に造った人でもある。社会福祉の先駆者のひとりとして、朝は惹き付けられた。

光明皇后がどれほど社会福祉に積極的だったか。その証拠は、正倉院に残された文書の中に残っていた。

「正倉院文書」といわれる古文書は、曝涼や宝物の外部への持ち出し、入れ替え要請や承認の正式な報告書である。これらに丹念に目を通すと、当時の保存・収納の方法や手順が手にとるようにわかった。

その中に、「金泥」と「桂心」の大量移動の記録があった。2015両もの金泥が正倉院から持ち出されている。金泥は、仏像の表面を装飾するのに用いる顔料であり、これは、東大寺の大仏の表面に塗るためのものだ。もうひとつの桂心は、肉桂（シナモンの同種）の樹皮の外皮を除いたもので、専ら薬用に用いた。施薬院用のものだ。

朝はこの事実を発見し、嬉しくなった。

日本でははるか昔、8世紀の頃から、社会福祉政策が行われていた。朝は、自分が社会福祉に関する論文を仕上げようとしていることが、日本の伝統の上にあることに気づき、勇気づけられたのだ。論文の執筆で霏がかかっていた朝の頭は、晴れ渡っていくかのようにだった。

11月15日、神道の宮司が皇室の宝物に対する保護を懇願する宗教的な儀式を執り行なった。かんぬきには新しい封紙が貼られた。曝涼はこれで完了だ。正倉院はまた1年間閉じられることになる。

朝は、気持ちも新たに東京へと戻ったのである。

日本での朝は、2つのことに取り組みなければならなかった。

ひとつは、日本の武具の研究だ。正倉院で数々の宝物を見た朝は、自分がもっと勉強しなければならないと痛感していた。

皇室博物館の秋山光夫氏と後藤守一氏は、朝に快く手を差し伸べてくれた。博物館の中に、朝のデスクを用意してくれたのである。しかも、朝が研究に行き詰まり、どうしようもない問題で行き詰って困っているのがわかると、後藤氏は、オリジナルの武具にあたるように、朝を博物館の倉庫へと連れて行ってくれた。そして、実学の講義をしてくれるのである。たとえば刀の鞘。身につけた人の動きを邪魔しないように、刀の鞘がどのように表装されているかということ、後藤氏は身振り手振りで教えてくれた。

しかし朝は、武具だけ研究していればいいのではなかった。

朝にはもうひとつ、博士論文の執筆があった。

「Law and Regulations for Protective Labor Legislation for Women and Children in Industry Japan」（日本における労働婦女子の保護法について）というタイトルになるはずの論文のため、朝はさまざまなデータを収集、調査する必要に迫られていた。

この論文は、朝の願いでもあった。

絹織物工場や製糸工場では、日本の若き乙女たちが過酷な労働に苦しんでいた。それを改善するためには、法律が必要だった。そして法律を整備するためには、実態を知る必要があった。

朝は、社会思想史を学ぶため、東京帝国大学の河合栄治郎教授のゼミに参加するようになった。

河合栄治郎教授は、農商務省の役人時代、工場法案研究のためアメリカに留学した経験を持つ。労働法の専門家として、国際労働会議の日本政府方針案起草に従事したが、上司と対立して退官。オックスフォード大学などで学んだのち、東京帝国大学教授となった。だが、軍部批判、ファシズム批判を繰り返し、職を追われ、失意の内に亡くなる。

河合教授のゼミでは、朝は文字通り「紅一点」だった。ゼミ史上初めての女性だった。男性の聖域だったゼミ室は、一日中タバコの煙が絶えず、まるで煙でくすぶる工場のもようであった。教授もゼミ生もそんなことには気をかけず、朝を見ると、気前よくタバコやマッチを差し出した。彼らなりの友情の証だった。

朝は実地のデータを収集するため、足繁く工場に通った。工場は騒々しく、1日いるだけで朝の耳はおかしくなった。

工場の少女たちは、まるで軍隊の部隊だった。小さくて器用な手先を持つ、働き蜂のような特殊な部隊。少女たちは、1日3交代で、一心不乱に働いていた。

もちろん工場には寄宿舍、食堂、そして娯楽施設があった。しかしこれが彼女たちの福利厚生を担保しているかといえば、決してそうではなかった。少女たちの労働環境を改善するためには、法律が必要だった。そしてその法律制定のためには、実態を知る必要があった。

朝にとって、日本の大学の男子学生は奇妙な存在だった。

彼らは、一紙以上の新聞を読まない。英字新聞を読むなどもってのほかで、まるで世界の出来事に関心を抱いていないかのようなだった。

朝にとって、日本人の男子学生が奇妙に映ったのと同じように、向こうから見れば、朝は「異邦人」だった。

「アメリカってどんな国ですか」

学生たちは、朝に話しかけるチャンスを見つけると、決まってアメリカのことを聞いてきた。朝は、海の向こうのあの大きい国についてできるだけ丁寧に答えた。

しかしこのことは朝を混乱させた。
私にとって、日本とは何なのか。
アメリカは自分にとってどんな存在なのか。
質問に答えるたびに、朝は自分がアメリカ人として答えていることに気づいた。アメリカからの視点で、日本を見ていたのである。
朝はそのことに驚いた。日本人である自分と、アメリカ人である自分との相反する感情のせいで、自分が引き裂かれそうになっていることに気づいたのである。
いったい、私は……。

1929年(昭和4)の夏。1年間の滞在は終わり、朝はまた、アメリカへと船で向かったのだった。もう最初の時のような不安はなかった。
アメリカが朝を待っていた。

松岡朝物語(仮称) 第5回

文／角山祥道

18

1929年(昭和3)夏、松岡朝を再び迎え入れたアメリカ・ニューヨークは、空前の建設ラッシュに湧いていた。

中でも耳目を集めていたのは超高層ビルの建設だ。それまでもニューヨーク市のマンハッタンには、それぞれ当時の世界一の高さを誇った、シンガービル(186.57m)やメトロポリタン生命保険会社タワー(213.36m)、ウールワースビル(241.4m)など、1900年代初期に建てられた高層ビルが林立していたが、1929年前後、人々はさらなる高み——摩天楼の建設を競った。

前年の1928年9月にはクライスラー・ビルディングの着工が始まり、1929年3月にはエンパイア・ステート・ビルディング、同年5月には40ウォール・ストリート(現在の ترامب・ビル)の着工が開始された。クライスラー・ビルディングは高さ282m(アンテナも含めると最頂部は320m)、40ウォール・ストリートは283m、とそれぞれ開業時に「世界一高いビル」と称えられたが、最頂部443.2m(屋上高さは381.0m)のエンパイア・ステート・ビルディングが1931年4月に開業すると、それぞれその座を譲ることとなった。

ニューヨークは世界有数の大都市へと成長し、株式市場の取引は世界最大となった。摩天楼は繁栄の象徴だった。

だが一方で、多くの人気づかないまま、アメリカ発の黒雲が世界を覆いつつあった。1929年10月のアメリカ株式市場の暴落(ウォールストリート・クラッシュ)に始まった恐慌だ。1930年代になると、その影響は世界各地に飛び火し、各国の銀行が次々に倒産。のちに歴史家から「世界恐慌」と名づけられることになる。

時代の急速な流れとは別の流れだったが、朝もまた、「時間の流れ」に翻弄されていた。日本からニューヨークに戻った朝は、自分の抱えている問題——時間の無さを直視せざるを得なかった。

博士号取得のためには論文を書き上げねばならず、さらには口頭試験の準備もあった。試験は1931年5月。すでに2年を切っていた。時間がどんどん少なくなっていることを朝ははっきりと自覚していた。

朝にとっての問題は、勉強だけしていればいいという身分ではなかったということだ。家業は関東大震災で傾き、親からの援助はもうあてにできない。生活費と学費を自分で稼ぐ必要があった。

朝は西57丁目の通り——マンハッタンのアメリカン女性クラブ(American Women's Club)に居を定め、美術品コレクターの分類の手伝いをしてお金を稼いだ。

顧客のひとり、アレグサンダー・モーズリーというドイツの紳士で、とてつもなく大量の日本の美術品を所有していた。朝は週に二晩、ドイツ人たちが集まる社交場「ジャーマンクラブ」に出かけ、彼の美術品の分類や評価を行なった。

さらに、メトロポリタン・ミュージアムの仕事も再開したのだが、生活が安定する反面、体力と自分の使える時間は削られていった。朝は博士号の単位のため、フランス語に磨きをかけるための勉強にも精を出さなければならなかった。博士論文の執筆もしなければならぬ。

朝は、1日のスケジュールを立て、起床時間、勉強時間、働きに行く時間、そして就寝時間などを細かく書いて壁に貼り付けた。分刻みのスケジュールである。唯一丸1日時間のとれる土曜日は、地下鉄でコニー・アイランドへ出かけて行っては、ハーフムーン・ホテルの窓際に陣取り、持参した資料を広げた。海からの爽やかで涼しい空気、そして波しぶきの音が、朝の疲れた体を鎮めてくれた。潮風は、ずっと感じていた鼻の息苦しさを楽にしてくれた。だがずっとホテルにいるわけにはいかない。朝には、絶対的に時間が足りなくなっていた。

新学期になり、朝は修士号を持つ身であったが、学生のための宿舎ブルックス・ホールへ戻ってもよいと許可をもらった。

朝の指導教官はサミュエル・マッキューン・リンゼイ博士という教授だったが、教授の夫人もまた、コロンビア大学出身で、博士号の保持者だった。そういった意味で、リンゼイ教授は朝のしようとしていることに、非常に理解を示してくれていた。

ある時、朝はいよいよ困って、リンゼイ教授に相談した。

「リンゼイ教授、私の体が悲鳴を上げています。学業と仕事を両立するには、もう体力がもちそうにありません。夜間にミュージアムへ働きに行くをやめたいと思っているのですが、どうしたらよいでしょうか」

「それでは、スカラシップ(奨学金)を手配してあげよう」

リンゼイ教授は親切にも、奨学金の申請をしてくれた。

ディーン夫人——メトロポリタン美術館のバッシュフォード・ディーン博士の夫人も、朝を励ましてくれた。残念ながらディーン博士は、朝が日本に帰国している間に帰らぬ人となっていたが、夫人との交流は今もなお続いていた。

「費用のことは何も心配しなくていいですよ。もしあの方が生きていたら、彼も同じことを言ってくれたはずですよ。あなたはミュージアムにとってかけがえのない人ですから。必要なお金が何であれ、私が送ってあげますよ」

お金の問題は、指導教官のリンゼイ教授の尽力で解決した。教授の手配で、特別研究費(フェローシップ)を受け取ることができたのだ。2学期分で合計1800ドル。このお陰で、お金の心配はなくなった。

そして最後に残った障害は、試験そのものだった。

朝はまず、睡眠時間を削ることから始めた。

自室の天井から紐を吊るし、そこに首をもたせた。首が下に垂れないようにするためだ。机に伏せたら最後、そのまま寝入ってしまうからだ。

机の脇には、片手で握れる石を置いた。眠くなった時は、この石で自分の腿を叩いた。

博士論文に関しては、構想はできあがっていたものの、筆記している時間がなかった。そこで、修士号を持つ若いアメリカ人女性にお願いし、口述筆記をしてもらった。朝はその写しを持ってコニー・アイランドのハーフムーン・ホテルに行き、静かな海のそばでそれを訂正したり、手を加えたりした。

試験期間が始まった。

朝は、ようやく刷り上がった博士論文のゲラ刷りを受け取りに、コロンビア大学内の印刷所に向かったのだが、その途中、いち早く試験が始まっていた学生とすれ違った。彼は明らかに気落ちしていた。学位が取れず、失敗したのだった。

朝は初めて怖じ気づいた。

私に博士号を取得する資格はあるのか。

試験官との最終面接をクリアする力はあるのか。

その日の夜、朝は早めに夕食をとり、そそくさとベッドに潜り込んだ。そしてアメリカでの生活の最中、事あるごとにそうしていたように、父・健一がしたためてくれた手書きの手帳に手を伸ばした。手帳はアメリカ留学の際に、父から手渡されたものだった。父はそれを3ヵ月以上かけて準備してくれていた。その美しい繻子の手帳は、前書きと28章の箴言からなり、父の繊細な筆跡でたためられていた。

朝は、父・健一の期待をまっすぐに受けとめていた。

姉の啓子はすでに嫁つぎ、松岡家の人間ではない。跡取り息子だった弟の健吾は、病で亡くしていた。朝は、父・健一にとって、たったひとりの「わが子」と呼べる存在だった。松岡家に唯一残った人間だ。そして、すでに男女同権の世を見据えていた健一は、朝に「女性らしく」生きることを最早、望んでいなかった。朝をアメリカに送り出した時点で、女性としてではなく、ひとりの人間として生きるよう朝に促したのだ。

世間一般には、女性は素直で従順であるのが当たり前で、夫や家族の言われた通りに生きることを求められていた。言うままに生きるなら、教育を受ける必要もない。

だが健一は、朝に、女性である前にひとりの人間として存在することを望んだ。強い意志を持つように祈った。たとえそれが、世間一般の常識からずれようとも、朝が朝でいること、そのことを父親として健一は願ったのだ。そのためにこそ教育が必要である、と。

実際、手帳にはこう記されていた。

〈神は男と女を等しく造られた〉

朝は、すでに憶えてしまっている手帳の、父の手書きの文字を目で追った。

〈自分の健康をしっかり守りなさい。これがまず重要なことです。うまくいくようになるために、規則正しい生活をしなさい。何時に起床して、いつ就寝するかよくわかっておきなさい。程よい食事をとりなさい。病気の時は、適切な治療をしてもらえるよう医者にご相談しなさい。健康は一人の

ものではないのです。人間はひとりでは何もできません。運というものが存在します。あなたはクリスチャンなのですから、どんな事態であろうと、結果は天にまかせて待つのです)

結果は天にまかせて待つ——まるで、明日の試験に対してのアドバイスのようにだった。

〈その家の習慣に従い、その家族のやり方に従いなさい。そしてその人達を尊敬し大切にいなさい。たとえもし、下宿人の立場であっても、自分自身がその家族に仕えている身であることを考えなさい。また他の場所にいる時は、そこの習慣や嗜好に従うことです。英語で言うなら When in Rome, do as the Romans do (ローマではローマ人のするようにせよ) ——郷に入っては郷に従えということです)

朝は今までのアメリカでの生活を振り返った。

When in Rome, do as the Romans do——この格言は、朝を慎ましくさせた。常に、お世話になっている家族や友人に自分をあわせるようにし、知らないことに首を突っ込む真似はしなかった。仮に論争になったとしても、朝は自分の意見を半分に抑えた。100%相手の言うことを聞く人間をアメリカ人は認めようとしませんが、フィフティ・フィフティまで歩み寄っても、卑怯だとは思われない。

〈自分自身を常にしっかりと処していなさい。アメリカはあなたを通して日本女性を判断するので、あなたが彼らにとっての日本人だということを常に頭に入れておきなさい)

そうだ、私は私である前に、日本人として見られているのだ。朝は、絶対に試験に合格するんだという思いを強くした。

朝はベッドの中で、手帳を閉じて、もう一度自分自身の目的を確認した。

考えてみれば、明日失敗したら、もうそれ以上悩むことはない。今まで最善を尽くしてきたのだ。後悔することは何もない。

手帳の中の父の言葉が、朝の口からこぼれ落ちた。

〈毎晩寝る前は、「力を与えてください」と神様に祈りなさい)

朝は神に祈りを捧げた。そして翌朝6時30分までぐっすりと眠った。

20

朝は、起きた時からすでに気分が高揚しているのを感じていた。

大丈夫。私はやるべきことをやってきた。悔いはない。

朝は、リンゼイ教授の待つ部屋の扉を開けた。

「おはよう、気分はどうですか？」

リンゼイ教授が20席ほどの椅子に囲まれた机から立ち上がった。

「かなり良いです。ありがとうございます」

時を同じくして、12人の教授が、朝の論文を手にして、入室してきた。朝は、席に着くよう指示された。社会学のテニー教授が、口頭試験の開始を宣言し、チョッキから懐中時計を取り出すと、静かにテーブルの上に置いた。

「さて、どんな本を読んだかね？」

テニー教授が口火を切った。

アメリカの博士号の試験では、事前に課題図書が100冊程度示される。その内容を試験では問われるのだ。

朝はできるだけ大きな声で、頭に思いつくまま、作者、内容、発行日などについて出来るだけ早口で話し始めた。立て続けに12冊の本について語ると、テニー教授が朝を制した。

「もうそれでよろしい、ミス・松岡」

続いていくつか細かい質問が続いたが、終始、テニー教授は気楽な感じで話してくれた。朝が、最初の一里塚を過ぎたことを自覚する前に、テニー教授は「満足です」と告げると、懐中時計をチョッキのポケットの中にするりと戻した。

続いて他の教授がひとりずつ、朝に対して、あらゆる角度や方面から厳しい質問を繰り返した。中でも、マッキーヴァー教授は、いつものような感じで、やや学究的かつ難解な、しかも外国人学生が瞬時に理解することが困難な英語を使った表現で、朝に質問をぶつけた。

「マッキーヴァー教授。私はアメリカに数年間おりますが、いまだに外国人留学生なのです。今日は少しばかり足が冷たくなっております」

教授陣の間から、笑いが起こった。

足が冷たくなる——cold feet という表現は、「おじけづく」とか「逃げ腰になる」という口語表現（スラング）だった。

「彼女はアメリカのスラングさえも勉強済みだよ」

マッキーヴァー教授のいかめしい顔は緩んで、やさしげで気楽な感じの表情に変わった。

以後も12人の教授からの質問は絶えることなく続き、口頭試験は4時間にも及んだ。

試験はようやく終わった！

「最終結果が出るまで、しばらく外で待つように」

リンゼイ教授が朝に促した。朝は深々と頭を下げ、教室の外に出た。朝は、「やり終えた」という満足感に浸ったが、同時に、喉がからからであることに初めて気づいた。朝はやっとのことで水呑場へたどり着くと、渴いた喉を潤し、ほっと一息ついた。

しばらくすると、リンゼイ教授が朝を呼びに来た。

連れ立って教室の中に入る。すると、教授たちが一斉に立ち上がって拍手を始めた。テニー教授は朝のもとに小走りで近づくと、朝の手を両手で強く握りしめた。

「今年最高の試験結果ですよ」

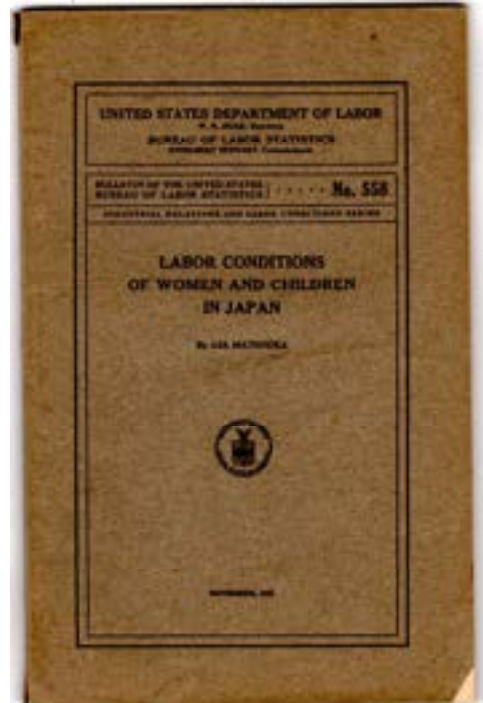
朝は、ただひたすら低く頭を下げた。

朝は隣のリンゼイ教授に口早にお礼を述べると、電話のところへ走った。電報を打つためだ。

相手は父・健一だった。朝は真っ先に父に伝えたかった。

あなたの娘がやり遂げたということ。

あなたの夢が叶ったということ。



朝の博士論文は
米国政府の刊行物として印刷される
という荣誉ある待遇を受けた

試験から数日して、大学から一通の手紙が届いた。

.....
 1931年6月2日
 バーナード・カレッジ
 ブルックス・ホール
 松岡朝様

親愛なる松岡朝様

博士号の学位に対するあなたの試験結果がこちらのオフィスに届きました。それが申し分のないものであるという報告を、謹んでお伝えします。

博士号の学位に必要なものはすべて終了なさいましたが、ひとつだけ、図書館に75冊分の論文の印刷物を、学位授与の前に寄託していただかなくてはなりません。

マックベイン学長秘書

リンゼイ教授は朝に、ワシントンの労働省が朝の博士論文を政府の印刷局を通じて印刷するつもりである旨、通知があったことを告げた。しかし冊子が朝の手元に届くまで1年かかるとのことだった。

つまり朝は博士号を手にするまで、1年待つ必要が生じたのである。そしてそのことは、1年分の生活費を確保する必要があることを意味した。

この難題は、マサチューセッツ州スプリングフィールドにある「ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミス美術館」からの手紙が解決してくれた。

館長のコーデリア・サージェント女史が、彼らの美術館が所蔵する日本の美術品コレクションの分類や評価をして欲しいと、朝に依頼してきたのだ。以前朝は、サージェント女史とメトロポリタン美術館で会い、面識があったのだ。

朝にとっては願ってもない申し出だった。朝はスーツケースに急ぎ荷物をまとめると、スプリングフィールドへと向かった。

ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミス美術館は、古いレンガ造りのイタリアの宮殿風の建物だった。ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミス氏と、その妻ベル夫人の国際的なコレクションからなり、19世紀の貴重なアメリカ絵画や、ギリシャやローマの古美術品、中国の陶器や翡翠、ペルシャ絨毯などと並んで、日本の漆器や武具が数多く含まれていた。

特に日本の武具のコレクションは膨大だったが、その価値を判断する専門家が美術館にいなかった。武具の多くは、ただしまい込まれていた。

朝は、まるで美術館の倉庫の中に住み込むような熱心さで、コレクションの再生に専念した。朝の眼前には、たくさんの品々が地下倉庫の梱包用の木枠に収まったまま、塵や埃、煤をかぶったまま積まれていた。朝は繊細な品々を慎重に洗浄していった。

倉庫は文字通り、宝の山だった。この上なく美しくすばらしい昔の能装束。見事な茶道具の茶碗に茶壺。インドのガンダーラ美術の仏像もあった。巻物の多くは修理が必要だったが、中には、見事な曼陀羅が含まれていた。

朝がもっとも興奮したのは大きな兜だった。

帽子のつばにあたる「目庇(まびさし)」が長く突き出し、後頭部と首を守る「鍔(しころ)」も立派だった。朝は、兜の裏地の下に刻み込まれている明珍信家の印を見つけた。明珍信家は、言わずとした日本の最も偉大な武具師のひとりだ。明珍信家の「家」には特別な飾り書きがあるのだが、この印はまさにそれだった。正真正銘の明珍作の兜——これはごくごく珍しいものであった。

日本の宝物の中で分類・整理する日々が続いた。朝にとっては至福の時間だった。

朝にとってのスプリングフィールドでの楽しみは、倉庫の中だけと限らなかった。

スプリングフィールドに着いたその日の夜のことだ。朝はへとへとに疲れていたが、どうしてもドラッグストアで薬を買う必要があった。

その日は7月4日で、しかも夜10時過ぎ。ほとんどのドラッグストアは閉まっている。朝は疲れきり、体の節々が悲鳴を上げていたが、それに気付かないふりをして、見知らぬ街の暗い通りへと歩を進めていた。

7月4日——この日はアメリカのインディペンデンス・デイ（独立記念日）だ。街のあちこちで爆竹の音がはじけ、ほうぼうで花火が上がった。

大通り交差点に差し掛かった時、長身で頑丈そうな警官が辻に立っているのを見つけた。

「あのう……、私はここがどこなのかよくわからないんですが、ドラッグストアを探しています。まだ開いているお店をどこか知ませんか？」

「ああいいですよ。今日は7月4日ですからね。皆、爆竹を見ようと外へ繰り出していますが、年中開いている店が一軒だけありますよ。タクシーが来るまで、ここで私のそばに立って待っててください」

朝はしばし、頼れる警官の傍らで体を休めた。

数分後、この親切な警官は1台の小型オープンカーの運転手に合図を送った。

「あなたは運が良いですよ、お嬢さん。この人がそのドラッグストアの主人ですよ。彼が店へ連れて行ってきて、薬を出してくれます」

これが朝と警官との友情の始まりだった。

彼はアイルランド系の40歳くらいの男性で、朝がそばを通るといつも満面の笑みを浮かべ、朝の「ハロー」という挨拶に、まるで友達のような気軽な調子で答えてくれた。

朝はおまわりさんと、ひと言ふた言、言葉を交わすのが習慣となった。

「アメリカと日本はもう二度と戦争はできないでしょう。我々はお互いに野球が大好きですからね」

1931年10月、ルー・ゲーリックらメジャーリーグ選抜が日本を訪れ、日本のオールスターチームと試合を行っていた。結果はアメリカの17戦全勝。この試合をきっかけに、日本にプロ野球チームが誕生していくのだが、アメリカの「国技」とも言える野球を、日本でやったことに意味があった。アメリカ人にしてみれば、ほんのちょっと前まで、ちょんまげ頭で鎖国をしていた国が、自分たちが愛してやまない野球をするようになるとは、夢にも思わなかったのだ。アメリカ人の中で、日本人との距離がぐっと縮まった。

その年の冬のことだ。

クリスマス、スプリングフィールドに雪が降った。しかしその警官はその日もずっと勤務中だった。朝は、父・健一が送ってくれた2枚の版画——歌川広重の浮世絵を包装紙に包み、馴染みになった交差点へ歩いて向かった。

「これは日本の版画ですけど、おまわりさん、私からのクリスマスプレゼントを受け取ってくださいませんか。私にしてくださったいろいろなことへのお礼なのです」

朝が言うと、彼は満面の笑みを浮かべた。

「本当にありがとう。そして、クリスマスおめでとう」

朝にとってのスプリングフィールドの一年は、楽しいまま、あっという間に過ぎ去った。

22

明けて1932年(昭和7)2月。朝のもとに政府の印刷局から連絡が入った。朝の論文は、政府刊行物第558号として印刷されたという報告だった。

論文のタイトルは、「Law and Regulations for Protective Labor Legislation for Women and Children in Industry Japan」(日本における労働婦女子の保護法について)。アメリカの労働省が発行した論文集に掲載され、出版されたということは、アメリカ人から見ても栄誉というだけでなく、日本の女性として初めての快挙だった。

社会福祉の仕事において、これからのキャリアを積むために必要な基礎を固めたと、朝は満足を覚えた。しかも英語という困難な言葉を克服した上での博士号である。朝の喜びはひとしおだった。

朝はやや勝ち誇った気分で、ニューヨークに戻った。アメリカ政府は掲載料として、500ドルを朝に提供した。大きな多色刷りの小切手で、上部には大きな鷲が描かれていた。友人や同僚たちにそれを見せると、皆当然の如く尊敬と畏敬の表情を示した。

朝は早速、コロンビア大学の図書館に75冊の博士論文——政府刊行物第558号を納入した。これで博士号の条件はクリアした。このまま博士号を申請すれば事足りた。だが朝は、卒業証書を6月の卒業式で受け取りたかった。

朝は再び、スプリングフィールドへ舞い戻った。そこには例のおまわりさんをはじめ、朝を迎えてくれる友人たちがいた。

卒業式の数週間前、ニューヨークに戻った朝は、博士用のガウンの衣装合わせをした。通常は黒い絹地が一般的だったが、朝はあえて、薄手のウール地を選んだ。かたどった袖にはビロードでできた3本のストライプが流れるようについていて、式用の正方形帽子モルタルボードには金色の房がついていた。

からりと晴れた青い空。朝は太陽の光に目を細めた。卒業式の日だ。会場にはどこかぴりっとした空気が漂い、同時に興奮があちこちに溢れていた。父からの指令は「自分自身を常にしっかりと処していなさい」であったが、大学の門に近づいて行くと、その瞬間、朝の頭の中からは、父の言葉もすっかり吹き飛んでしまった。

新しい白のドレスに黒いストッキング、白い靴。金色の房が垂れ下がったモルタルボードはかき上げていて、式服——アカデミックドレスは厳かに揺れていた。朝は、胸を張った。

私は、他の日本人女性と同じ格好——日本の伝統的な着物を着ていない。でも、私はアカデミックドレスを身にまとい、知と自由を手に行っている！

闊歩する朝の耳に、他の学生たちのささやき声が飛び込んで来た。

「あれが博士号のガウンなのよ」

朝は他の博士号取得者 (Ph. D.) の列に加わった。

朝の名前が呼ばれる。

朝は39歳になっていた。朝はこの日の興奮を忘れたことがない。

朝は幸せの絶頂にあった。

だがそれとは裏腹に、日本とアメリカの間には、暗い影が差し始めていた。

1931年(昭和6)年の満州事変を皮切りに、日本は中国大陸への侵略を開始する。1932年3月には、満州国の建国を宣言。日本が国際連盟を脱退し、国際社会から孤立するのは、満州国建国からちょうど1年後のことである。

日本で生を受け、アメリカに育てられた朝は、いわば2つの祖国を持つ女性だった。彼女もまた、時代の波に翻弄されることになる。

(つづく)

会費納入のお願い

年会費納入をお願いいたします。子ども達に、より良い日本を残すための当会の活動内容は現在まで高く評価されて参りました。これも皆さまのご理解があればこそでございます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

日本にあるものはオーストラリアには無く、オーストラリアにあるものは日本には無いと言われており、友好を深め、相互協力を推進することが重要な意味を持つ関係にあります。日豪両国の芸術専攻生の教育交流の発展や、オーストラリアやニュージーランドに寄贈した日本画の里帰り展の実現を通して、相互協力関係の深化を図りたいと思っておりますので、是非ご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 一般社団法人 海外と文化を交流する会
銀行振込 三菱東京UFJ銀行 渋谷支店(普) 0026193 海外と文化を交流する会

会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインヒル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail: official@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigai-bunka.org>